香川県

「小豆島らしい」特色ある米麦の生産振興

活動期間：令和元年度～継続中

○　小豆地域は、島しょ部でありながら水田農業が営まれ、県内唯一の「日本の棚田百選」も存在。しかし、作付は水田面積の３割にとどまり、近年、高齢化や人口減少が進み、農地の荒廃や集落機能の低下が懸念。

○　このため普及センターでは、棚田米やオリーブ堆肥米、ビール麦など、「小豆島らしい」特色ある米麦の生産振興に取り組む。

○　この結果、水稲の作付面積の減少に歯止めをかけ、小豆島産原料100%の地ビールなど、「小豆島でしか味わえない味」が誕生。

具体的な成果

１　需要に即した高品質・良食味米生産

■レンゲ作付やオリーブ堆肥を使った特別栽培に、ドローン防除やGAPを組み合わせブランド化。

※ブランド米数
R元：2→R3：4

写真1：ドローンを使った防除作業

２　需要に即した米の計画的生産

■鳥獣害対策とセットにした栽培講習会、サラリーマンのための夜間講習会等により、作付面積の減少に歯止め。

※主食用米作付面積
・R元：100ha
・R2：91ha
・R3：95ha

写真2：適切な電気柵の設置指導

３　麦類導入による二毛作の拡大

■ビール醸造家とのマッチングにより「小豆島産原料100%」の地ビールを開発・販売。

※ビール麦の作付面積
R元：0→R3：20a

写真3：小豆島産原料100%の地ビール「SHODOSHIMA100」

普及指導員の活動

令和元年度
■「小豆島らしい特色ある米麦の生産振興」を目標に設定。
■生産安定には鳥獣害対策が不可欠であることから、鳥獣害担当とワンチームで活動を開始。

令和2年度
■特産のオリーブの枝葉から作られたオリーブ堆肥の実証ほを設置。
■管内初となる「コシヒカリ」食味コンクールを開催。

令和3年度
■狭小な棚田に適した小型の田植機等の導入支援。
■オリーブ堆肥や食味コンクール開催による、高品質・良食味米の生産。
■鳥獣害対策などによる、需要に即した計画的生産の推進。
■麦の導入による二毛作の推進。

普及指導員だからできたこと

・栽培担当と鳥獣害担当が連携し、作物の栽培技術から鳥獣害対策まで一貫して支援することで、安定生産に結び付いた。
・地域をまとめるコーディネーター役として集落営農組織の活動支援や食品産業とのマッチングに成功した。

香川県

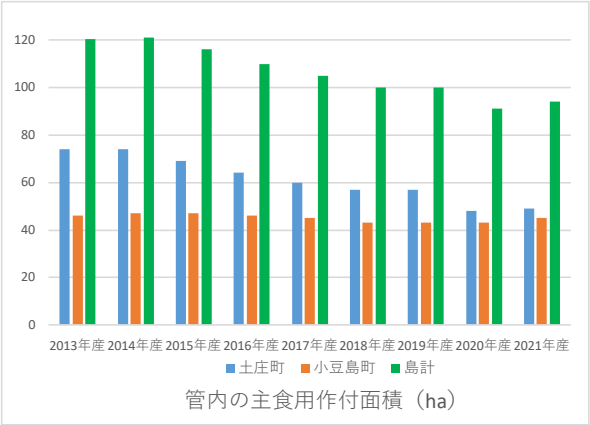
「小豆島らしい」特色ある米麦の生産振興

活動期間：令和元年度～継続中

１．取組の背景

小豆管内は、島しょ部特有の狭小で不整形かつ傾斜に位置する農地が多いが、小豆島町安田の「東條地域農業集団」での特別栽培米「安田の郷コシヒカリ」や小豆島町中山の棚田米、乾田直播栽培など、特色ある水稲生産が行われている。

また、土庄町伊喜末の「小豆島陽当の里伊喜末」では、実需者とのマッチングによるビール麦生産など、畑地のみの「小豆島らしい」集落営農が営まれている。



管内の水稲作付面積の推移

集落営農組織以外の水稲生産は、小規模農家が大半であり、農業者のリタイアや鳥獣被害により不作付け地の増加や水稲作付面積が減少し、地域の活性化や棚田など観光資源としての「にぎわい」が失われる恐れがあった。

そこで、水稲作付けによる農地の維持・管理を中心に、後継者への技術継承、「小豆島のブランド米」生産確保、棚田保全、鳥獣害対策、また、需要に応じた麦類生産による二毛作推進などが求められていた。

２．活動内容（詳細）

令和元年度から「小豆島らしい米麦の生産振興」を目標に、鳥獣害対策とワンチームで「小豆島らしい」特色ある米麦の生産振興を支援している。

１　水稲作付け推進と技術継承

普及センターだより、講習会で「めざせ100ha」をスローガンに、作付け推進を行った。

また、管内６地区での栽培講習会を開催し、特に後継者への技術継承のため夜間の講習会開催や、気象変動に応じたタ

「オリーブ堆肥」試験ほ場とドローン防除

イムリーな栽培管理の情報提供を行った。
　さらに、令和３年産から新たな奨励品種「あきさかり」の作付け推進を行った。
２　地域を支える新規オペレーターの発掘
　令和２年度に管内で初めて開催した、農作業の安全推進やＡＩ技術などを活用した農業機械を紹介する「小豆地区農作業安全研修会」が好評であったことから、３年度も開催を予定していたが、新型コロナウイルス感染拡大のため中止となった。
　このため、令和４年３月に「スマート農業推進リーフレット」を作成し、担い手などへの周知を図った。
３　「コシヒカリ」食味コンクールの開催
　令和２年度から「東條地域農業集団」での「コシヒカリ」食味コンクール開催の支援を行い、食味や品質の高位平準化が図られた。
　そこで、令和３年度は小豆管内全域でのコンクールを開催し、小豆島産コシヒカリの食味・品質向上と水稲作付け意欲の向上を図った。
４　新たなブランド米の創出と地域循環
　「東條地域農業集団」では、特別栽培米「安田の郷コシヒカリ」を生産し、県内でもトップクラスの価格帯で販売しているが、さらなる付加価値を高めるため、令和２年度から、「オリーブ堆肥」を用いた実証ほを設置し、新たなブランド米の創出と「オリーブ堆肥」の地域循環を進めており、令和３年度に新たなブランド米の栽培基準と生産者の選定基準を策定した。
５　棚田保全
　小豆島町中山は、農業者個々では機械整備が難しく、棚田の営農活動が課題となっていたことから、令和３年度に小豆島町農林水産課と連携し、県補助事業を活用した小型田植え機等の機械を導入しており、その活用を支援した。
６　特色ある麦生産による二毛作推進
　「小豆島陽当の里伊喜末」では、地元産原料を使用した「地ビール」原料のビール麦などの安定生産を支援し、経営所得安定対策の交付対象へ誘導した。

３．具体的な成果（詳細）

１　令和３年産水稲作付面積は95haと、前年産から４ha拡大し作付推進の効果がみられた。後継者への技術継承では、初歩的な問合せが大幅に減少するなど、一定の成果がみられた。
２　集落営農法人からは、県補助事業などを活用し、スマート農業機械の導入と集落内外からオペレーターを募りたいとの要望が寄せられ、今後、定例会で検討するこ

小豆島産原料 100%ビール「SHODOSHIMA100」

ととした。

3　食味コンクールでは、上位入賞者は普及センターが指導する「基本技術の励行」を順守しており、あらためて基本技術の大切さが理解された。

また、受賞者からは、「生産意欲向上につながった。令和４年産は10アール拡大する」など、水稲作付け拡大につながった。

4　「オリーブ堆肥」を活用したブランド米創出は、令和２年産食味値92点と、県内でもトップクラスとなった。これを付加価値に、令和４年に開催される瀬戸内国際芸術祭への来訪者などに「小豆島でしか味わえない」食材として活用されることとなった。

5　中山の棚田保全は、令和３年度に着任した地域おこし協力隊員と連携し活性化を支援するとともに、県補助事業で導入した農業機械の活用により、より一層の棚田保全が図られた。

6　平成30年度から取り組んだ小豆島産原料100％地ビールは、今年度、「SHODOSHIMA100」として商品化及び一般販売に至り、消費者から高い評価が得られた。

ビール麦の収穫

４．農家等からの評価・コメント

【東條地域農業集団】

特別栽培米は集団全体で取組んでいるが、栽培技術の足並みをそろえることが難く、品質のばらつきが大きかった。しかし、普及センターの熱心な指導のお蔭で、食味値も高得点で安定するようになった。

また、長年の目標であった法人化は、熱心な指導のお蔭で令和３年度に法人化することができた。普及センター、農業会議等の支援がなければできなかったと思う。

【小豆島陽当の里伊喜末】

新たに、「ホップ」の栽培にも成功し、遂に、全て小豆島産原料の地ビールを完成させることができた。この取組みを継続して地域の知名度アップにつなげ、活性化に結び付けたい。

また、過去にマッチングいただいた加工向けの「バジル」や「香川本鷹」の栽培も継続している。利用可能な農地はまだまだあるので、作付け拡大や新品目の導入も検討していきたい。

さらに将来、法人化も検討しているので、引き続き支援をいただきたい。

５．普及指導員のコメント（小豆農業改良普及センター　副主幹　三木　洋）

これらの活動によって、ブランド化や生産安定、新商品の開発など一定の成果を挙げることができた。農家からの、電話等での初歩的な質問が大きく減少したことからも、成果を実感している。

特に、「コシヒカリ食味コンクール」の受賞者から、「普及センターの指導どおりにしたら受賞できた。来年は10ａ増やす。」と言われたときは、嬉しさとともに手ごたえを感じた。

今後も、「小豆島らしい」特色ある米麦の生産振興を推進し、小豆地域の活性化に取り組んでいきたい。

６．現状・今後の展開等

引き続き、「鳥獣害対策とワンチーム」や「ブランド化による所得アップ」など、「小豆島らしい」特色ある米麦の生産振興に取組み、小豆島のにぎわいづくりを進めていく。